

続ソドムの飽食（後編）

調教開始

「それじゃ、ショーまで時間が無いから早速取りかからせて貰うわ！」

拘束台に固縛されたままの浦川侯爵家の母娘を見下ろしながら、恥じる様子も無く男達の目に全裸姿を晒したままの順子が告げた。

順子の目に宿る淫靡な光を見て晴子達はゾッとするものを感じた。

「別に怖がらなくても良いのよ・・・男に抱かれて、いたぶられるのがどんなに気持ちが良いか教えて上げるわ・・・」

青ざめて強張った表情で順子の方を見返す母娘に微笑み掛けた。

「お母様の方は大分この気持ち良さが分かって来たみたいね・・・」

「そんな事はありません！」

順子の言葉に、これまで受けた気も狂いそうな羞恥の中で、何か不可思議な陶酔感の様なものが過ぎった事を突然思い出され否定するように激しく首を振った。

「嘘おっしょい！貴方は男に抱かれて冷酷に扱われる程身体を燃やす女なのよ！」

と、厳しい眼差しで、呪いの言葉を吹き付けるように口にした。

貞女の鑑の様に尊敬していた母を愚弄する様な言葉に娘達は拘束台に縛り付けられたまま順子を睨み付けた。

「貴方は自分ではまだ気付いていないかも知れないけど、淫乱な血を持った女なのよ！いまそれを証明してやるわ！牛田！この女をいたぶって本性をあぶり出しておやり！」

ズボンを履いただけの半裸姿で、これまで順子の背後から身体を密着させ愛撫を繰り返していた牛田が前に進み出て来た。

「それじゃサービスしてやるぜ・・・」

良く日に焼け、贅つい筋肉に覆われた身体で、不気味な雰囲気醸し出しながら近づいて来る男に晴子は不気味なものを感じ取った。

牛田はまるでオムツを替えられる赤子の様に、身体を大きく二つに折り、扇の様に股間を拡げて頭の上に足を固定された状態の夫人の前に膝を付き、両手で左右の太股を握り絞めると開け放たれたままの股間の中心に突然顔を埋めた。

アッ！と、いきなり熱鉄を押し付けられたように悲鳴を上げ夫人は不自由な身体をくねら

せた。

夫人の狼狽も気にならないように、牛田は飾り毛を失いまるで童女の様にスベスベする肌に顔を押し当てた。

これまで夫との閨房の中でそのような事をされた経験の無い夫人は、男の荒い鼻息を剥き出しとなった敏感な箇所を受け全身がカーッと熱くなるのを感じた。

牛田の頭を左右から挟み込む太股は次第に赤みを増し、熱気が密着した頬に伝わって来た。股間が熱く火照ってくると共に、秘められたる部分の熟女の匂いはより濃厚なものと成って来た。

牛田は鼻先をそれに押し付けたまま、咽せるように熟した女の香りを鼻腔一杯吸い取った。

「何だかんだ言いながら、此処が湿ってきたぜ・・・お前も好きな女だな・・・」

熱く熱を持った秘園がジットリと湿ってくるのを発見して、ぼそっと呟いた。

気味の悪い男から身体の変調を指摘され、調教台に仰向けに横たわる夫人は、否定するように激しく首を振り立てた。

「お前、旦那からもこれまでこんな事をされた経験は無いんだろう？・・・うんと感激するようにたっぷりサービスしてやるぜ！」

牛田から房事の様子を言い当てられて狼狽える晴子が、あっ！と鼻に掛かった呻き声を上げた。

牛田の伸ばした舌先が陰門に触れたのだった。

牛田が言い当てた通り、二人の娘を産んでいるとはいえ、伯爵との行為は非常に淡泊なもので、単に華洞の中に男のモノを挿入して短時間擦過すれば終わるというもので、舌先や手指を駆使しての濃厚な愛技は経験した事が無かった。

それが、今性の奥義に長けた男から責め立てられ、その身体の奥深くに秘められたモノを引きずり出されようとしていた。

「中々美味い汁だぜ！」

淫門より溢れ出てきた女の蜜を舌に受け感激したように声を上げた。

そして、舌先を窄めて淫孔に突き立て、舌を蠢かせて愛液を絡め取るように啜った。

牛田の卓越した舌技に夫人は鼻に掛かった甘い悲鳴を上げながら拘束された身体をくねらせた。

夫人の左右に置かれた調教台に拘束されたままの娘は、男から股間を嘗められて身悶えを

続ける母親を心配そうに見詰めていた。

「大分開いてきたようだから、そろそろ頂くとするか・・・」

夫人の股間に顔を埋め一所懸命愛撫していた牛田が顔を離してすっくと立ち上がった。

既に股間のモノは隆々と天を向いていた。

牛田の顔面は夫人から流れ出た樹液でテカテカと光っていたが、気にする様子も無く夫人の両脚を抱え込み、濡れそぼるその中心に宛がった。

熱く硬い肉塊が身体を押し分けて入って来るのを感じて、あっ!と悲鳴を上げて身体を硬直させた。

そんな夫人の反応を楽しむように、ズブズブと身体を埋めて行った。

再び娘達の眼前で男を受け入れる姿を晒す苦痛に目を硬く閉じた。しかし、目を閉じて暗闇の世界に入ると下腹の祠を前後運動する逞しい男の肉塊が嫌でも意識させられ、その淫靡な蠢きに不可思議な陶酔感が蘇って来るのを意識させられるのだった。

「どう？其処の具合は？」

夫人の陰門に突き立て、ゆるやかに腰を反復運動させる牛田に尋ねた。

「駄目だな・・・ユルユルのガバガバだ！こんな粗マンじゃ旦那も呆れて他所に女を囲うのも無理ないな・・・」

腰を使いながら冷徹に評価を下した。

夫の不貞の原因が自分の身体に在ったと指摘され、牛田から突き立てられながら、悲痛な表情を浮かべた。

「ほら！もっと絞めて見ろ！」と、自らのモノを突き立てながら、平手で夫人の下腹を何度も叩いたが、不満そうな顔は変わらなかった。

「兎に角安く女を抱ければ、それで良いと言う客なら喜んで抱くだろうが、金に糸目を付けず名器を抱きたいと言う客相手には無理だな・・・此処の筋肉を相当鍛えないと売り物にはならないが、何しろこの歳じゃな・・・侯爵夫人が売春婦になったと聞けば物珍しさで一回は客が付くだろうが、抱いてみればすぐに厭いときるだろう・・・」

捕らえてきた女達を調教して、好色な金満家の相手をさせて荒稼あらいぎしようとしていた計画が挫折した事に残念そうに呟いた。

「前の穴は使い物はないが、後ろの穴はどうか？」

ゾロリと女の祠から抜き取ると、直ぐ下の菊花の中心に押し当てた。

不潔な穴に押し入ってこようとする硬い陰茎に身体を震わせて狼狽したが、度重なるピストン攻撃で弛緩した筋肉と連携している菊の座の輪状筋は抵抗する力も無く、夫人の身体から分泌された粘液に塗された長大な肉塊を受入始めた。

額にびっしょりと汗を浮かべ眉根を歪ませて、腸内から襲い来る激烈な圧力を堪えた。

とうとう根元まで肛口内に押し込み、暫くの間その内部の様子を自らの分身を使って確認するように、静止していた牛田であったが、やがてゆっくりと腰を前後させ始めた。

「どう？お尻の穴の具合は？」

夫人の後口に突き立てたまま無言で抜き差しを繰り返す牛田に順子が尋ねた。

「まあ、不通だな・・・」

ゆっくり、そして時には激しく腰を打ち付けて、その内部の具合を探查しながら、特に感激を与えるものは無いと、冷たく評価した。

酷評を突きつけられたが、前の穴に続いて後ろの穴も蹂躪されている夫人は、男のモノがもたらす刺激に懊悩の中に居た。

ブルブルと身体を震わせ、言葉にならない呻き声を上げながら、牛田が腰を打ち付ける度に、虚ろとなった秘園の中心からはおびただしい泉水が噴き出していた。

「ふふ、感度だけは良いようだな・・・この淫乱女が。」

腰を振り立てながら、目を細めて呟いた。

男から不浄の穴に突き立てられて身体を燃やす母親の姿を盗み見て、信じられない物を見たように目を逸らす姐の聖子であった。

「それじゃ、おしゃぶりの方は、どうかな？」

双臀の間に埋め込まれていた肉塊を引きずり出し、調教台の頭の方に移動した。

狭い台ゆえ、晴子の頭は拘束台からはみ出していたが、牛田は晴子の後ろ髪を掴むとグイッと下に引っ張った。喉がいっぱい引き伸ばされ、上を向いていた晴子の顔が正面に立つ牛田の股間の方に向いた。

其処には猛々しいモノがこちらを向いて突き出していたが、度重なる暴行で正常な意識を喪失していた夫人はボウとそれを見詰めていた。

夫人の愛液と腸内の汚物に塗れたモノが、鼻先を^{かす}掠めるようにして、肉厚の唇に押し当て

られた。

夫人は静かに唇を開き始め、その醜悪な臭いを発する肉塊を口内に収め始めた。

散々腸内を抉った不潔な男の肉茎を自ら口に含み始めた母親の姿を目にして娘達が悲鳴を上げた。

そんな娘達の泣き叫ぶ声も耳に入らないのか、熱に浮かされた様に無心で、しゃぶり続けた。

それは、頼るべきものが無い世界で、唯一自分に与えられた物に縋り付く様な熱心さで、頬を窄めて激しく吸い続けていた。

まるで憑かれたように牛田のモノを一心不乱に啜え続ける晴子の下半身に順子が近づいた。その手には大きな張り形が握られていた。

それをグイッと牝芯に押し込んだ時、上下から串刺しにされた衝撃に、晴子の身体がビクッと痙攣した。

その衝撃で口から飛び出してしまうように、夫人の長い髪を握り絞めた牛田は、令夫人の口内に自分の分身を注挿続けていた。

順子は牛田の評価が正当か確認するため、夫人の華洞内に挿入した筒具を操作し始めた。巧みに張り形を操り、夫人の性感を刺激しながら、その抵抗感の無い反応にフーンと溜息を吐いた。

「フーン、どうしようもない粗マンね・・貴方の言う通り、これは(性の)ベテランの金満家の相手をさせるは無理そうね・・いっそのこと此処をうんと拡張して、凄く大きなモノも呑み込めるように開発して、ショーで客を驚かせる一てのは、どうかしら？」

「お前のケツの穴みたいにか？」

牛田が夫人の口内の感触を楽しみながら面白そうに聞き返した。

「失礼ね！私のはもっと柔軟で繊細だから、細いの中から太いので十分に楽しまして上げられるわよ！」

調教台の配置が変えられた。

母親を中心にして両側に娘という配置は変わらなかったが、今回は頭の向きが逆で、二人の娘が頭を向ける方には母親は尻を向けるという互いに逆の体勢となった。

そして、椅子の様な調教台の座面には腹ばいの姿勢で固定され、女達の尻は短い座面から突き出す形で縛り付けられていた。枠しか無かった背もたれ部分には、二枚の半円状にく

り抜いた板が取り付けられ、座面から飛び出した頭を拘束する様に、上下から二枚の板に穿たれた丸穴で頸を挟み付けた。そのため哀れな女達は頸を振る自由も封じられ、正面に顔を向けるしか無かった。

「母親の方は粗マンでどうしようもないけど、貴方達はまだ若いから磨けば名器になる素質はあるわ。これから私達で腕に縊りを掛けて鍛えて上げるからそのつもりでね・・・」

相変わらず全裸姿の順子が、母子の周りを回りながら話しかけた。

娘の頭の方から二人の男が近づいて来た。手には黒いゴム製の野太い張り形が握り絞められていた。

「お前達は昨晚目出度く処女を失ったが、もう一つの穴の方は未経験だからな・・・お抱えの娼婦になったら前の穴だけでは無く、全身の3つの穴を使って客を喜ばせなければならぬ・・・」

怯えた表情の二人に張り形の大きさを見せつける様にして声を掛けた。

「これからお前達の後ろの穴を鍛えてやるぜ！」

男達が手にする太い淫具で後口を犯すという残酷な意図を察知して、娘達から悲鳴が上がった。

娘達の背後に回った二人の男が、調教台からこれ見よがしに突き出された白い尻をいやらしい手付きで撫でながら言った。

娘達と逆方向に配置されている晴子は、男達が手にする物を見て、これからそれで娘達の後口が蹂躪されるのだと知って、引き攣った声を上げた。

「お願いします！その責めは私がお受けします！ですから、どうか娘達を助けて上げて下さい！」と、涙を浮かべて哀願した。

「うるせー！お前は、お前の身体を開発して貰えば良いんだ！」と、泣いて懇願する夫人に怒声を浴びせ掛けた。

筒具を握り絞めた男達は剥き出しの菊座の中心にその先端を押し付けると左右にグリグリと捻って、押し込もうとした。

乾ききった所にいきなり播り粉木のような形をしたゴムの棒を押し込まれる激痛に姉妹は堪らず激しい絶叫を發した。

「おやおや・・・娘達が痛がっているぜ！ここは元々潤いの無い所だからな・・・」

男達は陰具を娘達の秘所から離すと、肛門に押し当てられていた先端部を晴子の唇に押し当てた。

「娘達が痛がっているぜ。ここは一つお前がねぶって滑りを良くしてやったらどうでい・・・」

男達の狼藉を目の前で見せられ、娘達の絶叫を耳にした夫人は、少しでも娘達の苦痛を減らすように、必死になって男達の押し付けるモノに舌を這わせ、唾液で濡らしていくのであった。

その陰具が晴子の唾液でタツブリと濡れている事に満足したように、再び娘達の秘所に押し当てた。

その先端部がほんの僅か菊の蕾をこじ開けた所で、激痛に堪えられず再び悲鳴が上がった。「おやおや、まだ潤いが足りないようだぜ・・・」

再び男達は筒具を引き上げ、左右から交互に夫人の口の中に頬張らせた。

こうして、母親の唾液で潤滑されたモノを少しずつ肛孔にねじ込んでいった。

そして、娘達が激痛に堪えかねて悲鳴を上げる度に、その輪状の入口を潜ったモノを母親の口内にねじ込むのであった。

陰具の先端が数センチ程埋め込まれた頃になって、拘束台の首かせにより後ろを振り返って見る事は出来ないが、背後からの雰囲気、自分達が悲鳴を上げれば、自分達の腸内を潜った汚いモノを母親が味合わされることになるに気づいて、姉妹は激痛に堪えようと悲しい決心をした。

額にびっしょりと汗を浮かべ、歯を食いしばってそれを迎え入れようとする姉妹に、

「不通ならこう云うことをする前には油でも塗って滑りを良くしておくもんだが、お前達が相手にするような客は、そんな事はお構いまして、いきなり突き立てようとする客が多いからな。お前達も自分で其処を開く練習をして、何も潤滑していなくても受け入れられる身体に改造するんだ！」

昨日の肛門栓によるダメージの残る腸内を、今や 10 センチ程突き立てられ、前後に抜き差しされる姉妹は、歯を噛みしめてその激痛に向かい合っていた。

「どうやら大人しくなった様だな・・・」

玉の汗を浮かべ、顔を歪めながら、声を潜めてそれを受け入れようとしている娘達に満足そうに呟いた。

「それじゃ、次は母親の方の身体の開発をするか・・・」

もう一人の男がノソッと立ち上がり、晴子の剥き出しの尻の方に近づいた。

これまで、娘達が男達から暴行される様子を見せ付けられ、オロオロとしていた晴子であったが、自分の番が回って来たと知ってゾッとするようなものを感じた。

母親の尻を両側から挟む様に位置する娘達は、ゆっくりとこちらに近づいてくる男の手にする物を目にして、自分の責めの苦しさも忘れて引き攀った声を上げた。

その娘達の異常な様子に不安に駆られた夫人は、「どうしたの？どうしたの？」と、怯えた声を上げた。

母親の問いかけにも関わらず、娘達は言葉を失い、血走った目でそれを見続けた。

それは大人の男の前腕程もある巨大な張り形であった！

「どうしたと言うのだ？こんな物順子嬢なら後ろの穴にだって易々と呑み込んでしまうぜ・・・」

母子の狼狽える様子に、巨大な陰具を手にした男が嬉しそうに口にした。

別の男も手伝って晴子の秘園をくつろげ、その周りを覆う襞を押し広げた。

剥き出しとなった女陰の中心にその巨大な筒具の先端を押し当て、ぐっと力を込めた時、母娘の口から同時に、イヤーーー！という悲鳴が漏れた。

慰労会の準備

「どうだ？慰労会の準備は進んでいるか？」

空襲で屋根に穴が開き、所々仮設のトタン板を敷いただけだった大広間の屋根も恒久の立派な屋根に吹き替えられ、任夫達が材料を手に忙しそうに部屋の中を動き回る様子を眺めながら、中島が女体調教担当の牛田に問い掛けた。

「はい、女達の肉体改造も順調に進み、慰労会には問題なくお披露目出来るものと思います。」

女達の調教スケジュールを慰労会の日から頭の中で逆算しながら答えた。

横浜の方でいかがわしい商品を路上に並べて販売する闇市を経営していた中島達は、順子が多助の加入により、進駐軍のデポから舶来品を潤沢に仕入れる（実際は裏帳簿

の横流しではあったが・・・) 事が出来る様になり、その業容を急拡大していた。

そこで、中島はこれまでの闇市の形態を改め株式会社として出発しようと計画していたのだった。

そして、これまで使役して来たヤミ商人の慰労と新会社の設立発表を兼ねて今月末に慰労会兼新会社設立式を開く予定にしていたのだ。

新会社と言っても看板が変わるだけで、傘下のヤミ商人がそのまま従業員となり、その組織内の非合法性はそのまま残る事になるのではあるが・・・

脱走兵で、金田伯爵とその使用人の強盗殺人犯である中島達は、その前歴を隠すため今は三島と名乗っていた。

空襲で膳本類が全て消失した地方都市の役場に行って、年長の小島を長兄、中島を次兄、大島を末弟として新規に戸籍を得て、過去を消し去っていた。

憲兵隊に居て種々の情報を得られる立場に居た中島は、終戦前から周到に準備を巡らせていたのだった。

従って、配下のヤミ商人は何も知らず、中島達の事を本当の三兄弟と信じ込んで、三島さんと呼び、事情を知る伴に脱走した元憲兵達もヤミ仲間と居る時は本名を呼び合うことは無かった。

順子の周囲に居る米軍兵のグループは、全員順子の愛人のマクロード大佐の部下であり、ロジスティクスを管轄する大佐の部隊では自由に物品を横流しすることが出来た。

マクロード大佐は現在韓国に赴任しており不在であったが、大佐の築き上げたグループはそのまま機能していた。

そして、その立場を利用して進駐軍の物資を順子を通して三島組に流していたのだった。

順子や三島組と接触を繰り返す内に、次第に彼らのモラルは低下して行き、横流し品を三島組に運び込む間に次第にその非合法的な内幕（旧貴族の女を誘拐監禁している事）に触れるようになり、女体調教にも興味を示し、何時の間にか女達の虐待に参加する様になっていた。

「オー！ワンダフル！」「インクレディブル！」黒人兵のジョーとブラウンが聖子と明子の淫門を背後から突き立てながら、感に堪えない声を上げた。

隣では晴子夫人が二人の白人兵から前後を突き立てられていた。

順子に繋がる米軍兵のグループは、今では暇があれば三島組の事務所を訪れ、地下の調教室に幽閉された哀れな元貴族の女達を自由に抱くようになっていた。

「どう？気持ち良い？」

順子が姉妹を責め上げる二人の黒人兵に話しかけた。

二人の黒人兵は満面に笑みを浮かべて親指を立てた。

「実は、お願いが在って・・・今度の慰労会にスターとして出演して貰えないかしら？」

慰労会にスターとして出演すると云う話を聞いて、思わず二人は興味を示した。

話を聞くと、今月末の慰労会で舞台に立って、三島組のヤミ商人達が見守る中で、女達と絡む役という事であった。

女とのセックスに目が無く、露出癖があり自分の巨大なモノを日本人に見せ付けたいとの願望を日頃から持っていた二人は順子の話に快諾した。